

令和8年3月15日

保護者の皆様
地域の皆様

さくらの学び舎 世田谷区立笹原小学校
校長 吉田 健二

前年度の改善方策について実行した結果

「令和 6 年度学校関係者評価委員会報告書」に基づく改善方策について、令和7年度に実行した結果は以下の通りとなります。

項番	改善方策	実行した結果
1	学校だより、すぐーる配信などを活用し、アンケート回答のお願いを継続する。回答率の見える化を図るため回答率の掲載も継続する。評価項目の精選等についても、来年度の学校関係者評価委員会で検討していく。	すぐーる配信については、回答開始から回答締切まで、前年度と同程度の頻度・回数でリマインド配信を行った。配信の際には回答率を掲載し、進捗状況の見える化を図った。その結果、回答を促す取組を継続的に行うことができた。一方で、保護者の全体回答率は64%(昨年度69%)となり、回答率は前年度と比較してやや減少した。今後も、回答しやすい方法や周知の工夫について検討していく必要がある。
2	来年度の重点目標に「人権意識(やさしい心、思いやりの心、多様性を尊重できる心)をもった子どもの育成」を掲げ、引き続き他者の「良さ」を受け止められる子の育成を図っていく。	今年度の重点目標に位置付け、教育活動全体を通して、人権意識(やさしい心、思いやりの心、多様性を尊重できる心)の育成に取り組んだ。道徳科や学級活動、異学年交流等の機会を通して、他者の「良さ」に目を向ける指導を継続した結果、相手の思いを受け止めようとする姿や、思いやりのある言動が見られる場面が増えた。一方で、多様性の尊重については、今後も発達段階に応じて継続的に指導していく必要がある。
3	コロナ禍後においても、コロナ禍では流行しなかった感染症の流行が続いている。また今後、未知のウイルスの発生や流行にも備えていく必要がある。コロナ禍で身に付けた基本的な感染症対策については、日常化できるよう教育活動や保健指導を継続していく。	コロナ禍で身に付けた基本的な感染症対策について、日常の教育活動や保健指導の中で継続して指導した。手洗い、換気、咳エチケット、体調不良時の適切な対応等について繰り返し確認した結果、感染症流行時にも基本の感染症対策を実行しようとする意識の定着が図られた。今後も、季節性の感染症

		や新たな感染症の発生に備え、状況に応じた柔軟な対応を継続していく必要がある。
4	朝読書や学校図書館の効果的な活用、読書週間の取組等を継続し、読書活動の充実に取り組む。また、社会環境の変化の中で、紙の媒体による読書離れの進展が活字離れにつながらないよう、学習用タブレット端末のブックアプリの活用やデジタル環境下での読書やテキスト読解等の調査も模索していく。	朝読書や学校図書館の活用、年3回の読書週間の取組を継続し、子どもたちが本や文章に触れる機会の充実を図った。また、学習用タブレット端末を活用して文字情報を読みとる機会も適宜設け、紙媒体とデジタル媒体の双方による読書の在り方を模索した。今後は、活字に親しむ力や読解力の育成につながる活用方法をさらに検討していく必要がある。
5	笹の子班活動に継続して取り組んでいく。下学年の児童が上学年の児童の活躍に憧れを抱いたり、上学年の児童が下学年の児童のお世話を通して自分の成長を実感したりすることが小学校段階でのキャリア教育にも繋がるという意識を持って、学校全体で指導していく。	笹の子班活動に継続して取り組み、異学年で関わる機会を計画的に設定した。その結果、下学年の児童が上学年の児童の姿に憧れを抱いたり、上学年の児童は下学年の児童の世話を通して自分の成長や役割を実感したりする姿が見られた。異学年交流を通して、互いを思いやる気持ちや責任感を育むことができ、小学校段階におけるキャリア教育の充実にもつながった。
6	自律的な学びを支える、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図るために、学習用タブレット端末を活用していく。学習用タブレット端末を活用した単元・授業・個別学習を構想し、日常的な実践を図ることにより、「探究的な学び」「個別最適な学び」「協働的な学び」の充実につなげる。	学習用タブレット端末を活用した授業や個別学習を継続し、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図るとともに、児童一人一人の学びに応じた支援に努めた。各学年において、調べ学習、考えの共有、反復練習等の活用場面が広がり、日常的な実践が進んだ。その結果、「個別最適な学び」や「協働的な学び」につながる授業づくりが進展した。今後は、活用の質をさらに高め、「探究的な学び」の充実につなげていく必要がある。
7	毎月実施する「あいさつ週間」の取組を来年度も継続する。また、あいさつ週間以外においても学校内であいさつを励行し、日常的にすすんであいさつができる子どもを育成する。その際、学校内だけでなく、家族や地域の人たちにも挨拶の輪を拡げていくことの価値を児童に伝えていく。	毎月の「あいさつ週間」の取組を継続するとともに、日常的にも教職員から積極的に声をかけ、校内で進んであいさつする気運の醸成に努めた。その結果、登校時や校内生活の中で自然にあいさつを交わす姿が見られるようになり、学校全体の温かな雰囲気づくりにつながった。今後は、学校内にとどまらず、家庭や地域にもあいさつの輪がさらに広がるよう、継続して働きかけていく必要がある。

8	<p>2月5日に在校児童代表として6年生がポプラの植樹を行い、2月13日に地域の方々を招待し「ポプラの木集会」を行った。来年度は、ポプラの若木の生長を見守りながら、開校記念集会や運動会等の学校行事の機会を活用し、ポプラをシンボルとして学校への帰属意識を高める取組を行っていく。2年度の学校創立70周年に向けて盛り上げていく。</p>	<p>ポプラの若木の成長を見守りながら、開校記念集会等の学校行事の機会を活用し、ポプラの木を本校のシンボルとして意識できるよう取り組んだ。その結果、児童がポプラの木に親しみをもち、学校の歴史や伝統に目を向ける姿が見られるようになった。</p>
9	<p>同じ学び舎である桜丘中学校との交流(学び舎あいさつ運動、本校児童の中学校体験、中学校生徒会による本校訪問等)を継続して行うとともに、交流の様子や同中学校の情報について児童や保護者に伝える機会を創出し、意図的に発信していく。</p>	<p>桜丘中学校との交流について、学び舎あいさつ運動、本校児童の中学校体験、中学校生徒会による活動紹介等を継続して実施した。また、交流の様子や同中学校に関する情報について、児童や保護者に伝えるよう努めた。その結果、児童が中学校進学への見通しや安心感をもつことができ、同じ学び舎としてのつながりを意識する機会となった。</p>
10	<p>「わくわくシート」「のびのびシート」「ぐんぐんシート」の取組を継続し、子どもたちが自己の活動を振り返り、めあてを設定する機会を引き続き設けていく。また、学校内外の子どもたちの頑張りを称える全校表彰を定期的に行い、「努力」することの素晴らしさを価値付けていく。</p>	<p>「わくわくシート」「のびのびシート」「ぐんぐんシート」の取組を継続し、子どもたちが自己の活動を振り返り、めあてを設定する機会を設けた。また、学校内外での頑張りを称える全校表彰を定期的に行い、「努力」することの価値付けを行った。その結果、児童が自分の成長や努力を意識して次の目標を考える姿が見られるようになり、前向きに取り組もうとする態度の育成につながった。</p>
11	<p>キャリア教育については狭義の「職業教育」だけでなく、「集団の中での自分の役割の自覚」や「成長を振り返り、少し先の自分の未来を想像する」なども含めたものとして、発達段階に応じて進めていく。また、普段は身近な大人が働く機会を見るのが少ない子どもたちにとって、子ども縁日やどんど焼き、餅つきなどの本校独自の地域行事は、自分の身近な大人たちが協力して働く姿を見られるよい機会である。このような場も積極的に活用して、協力して働くことの素晴らしさを価値付けていく。 上記のことについて、保護者や地域の方々へも発信し、「キャリア教育」への理解啓発を図っていく。</p>	<p>キャリア教育については、狭義の職業教育にとどまらず、「集団の中での自分の役割の自覚」や「成長を振り返り、少し先の自分の未来を想像すること」も含めたものとして、発達段階に応じて進めた。また、地域行事等の機会を活用し、身近な大人たちが協力して働く姿に触れさせることで、働くことや協力することの大切さを価値付けた。その結果、児童が自分の役割や将来について考える機会が広がった。あわせて、保護者や地域の方々にも学校が捉えるキャリア教育の趣旨を発信し、理解啓発を図ることができた。</p>
12	<p>令和6年度学校関係者評価報告書における様々な項目の分析において、児童、保護者の肯定的な回答率が上昇していることについて言及があった。しかし、学年別に見てみれば、ばらつきがあり全体傾向だけで判断することはできない。学年別、学級別の状況</p>	<p>学校関係者評価報告書の分析を踏まえ、学年別・学級別の状況にも目を向けながら、個別最適と全体最適のバランスを意識した学校運営に努めた。また、教職員間の情報共有と協働体制の充実を図り、「チーム笹原」とし</p>

<p>を把握しながら、人的リソースが限られた中で、個別最適と全体最適のバランスをとりながら適切に学校運営を行っていくことが求められる。そのためにも、教職員の協働態勢の充実を図り、「チーム笹原」としての学校運営を推進する。そして何より、教職員に欠員が生じる事態は、学校の状況を一変させるリスクとなる。教職員の心身にわたる健康の維持を図り、教育活動の安定的な実施に注力する。</p>	<p>て組織的に対応することを推進した。その結果、限られた人的リソースの中でも、教育活動を概ね安定的に実施することができた。一方で、個に応じた支援の充実と教職員の負担軽減、心身の健康の維持については、引き続き重要な課題である。</p>
---	---